

【論文】

清水豊子・紫琴（二） 「女権」と愛

江 種 満 子

SHIKIN/SHIMIZU Toyoko

On Joken (Women's Rights) and Love

EGUSA, Mitsuko

要旨：前稿で中断した「こわれ指環」論を発展させ、テキスト全体の構造を、「女権」という主題軸と「指環」によるレトリックの軸の相互関係としてとらえた。さらにこれら二つの軸に埋もれるようにして、植木枝盛のいわゆる「歓楽」への視線が瞥見できる点を指摘。これはのちの紫琴時代のテキスト群がみせる粘弾性の強い人間観の貴重な兆しである。

しかし紫琴時代に至るまでには、女権論者清水豊子を挫折させた二つの体験（大井事件による妊娠出産と古在由直との結婚）が介在する。この時期を、豊子書簡と古在書簡および掌篇「一青年異様の述懐」によって考えた。その後、夫の由直の留学によって僥倖のように訪れる紫琴時代をいくつかのテキストによって読み解く。なかでも「葛のうら葉」の位置は最も重要である。「葛のうら葉」は、構造的に清水豊子時代の「こわれ指環」をなぞるかにみえて、じつはその後の豊子の体験と英知と想像力を結集して、異質な世界へ越え出た成熟の文学的達成である。

キーワード：女権、歓楽、女性身体、愛、裏側

5. 「こわれ指環」(2) 主題とレトリックの間

本稿は前項での「こわれ指環」(1)¹⁾について「こわれ指環」を読み解き、さらにそのあとの紆余曲折に富んだ清水豊子・紫琴の体験と、第二

期の小説群を検討し、この作家の全容にせまる試みである。

前稿の「こわれ指環」(1)では、「こわれ指環」のプロットを動かす鍵として、指環が喚起するイメージ効果を指摘した。しかもその指環に託された意味が、小説のごく早い段階で、なにげないかたちで別の意味に切り替えられていることも、指摘した。意味変換は、出来事を体験する「私」に対して、それを語る「私」(この小説では物語全体の統括者としての内包された作者)によっておこなわれたものである。すなわち、はじめは夫婦双方にとって格別な意味もなかったはずの指環の授受が、あとから、女権に覚醒した妻によって、一夫一婦の「契約」を意味する象徴記号へと読み替えられたのである。けれどもその読み替えは、女権論に目ざめた妻一人の論理にもとづいており、かりに夫が指環に契約の意味はなかったと主張したばあいには、夫の理解を得ることはできない。したがって指環の表象転換は、この一对の男女が理解し合える共通の土俵にはなっていない。

しかし、たとえそこに論理的な片手落ちがあろうとも、ぜひとも語り手は、テキストの全体的な戦略としてなるべく早くその布石を打つ必要があった。一夫多妻がまかりとおる日本の結婚事情を、結婚契約の違反として批判するストーリーを語るためには、読み替えは欠かすことの出来ない前提だった。

「こわれ指環」の世界は、いったん指環を有徴化すると、一夫一婦の契約・女権の問題にだんだん覆われていく。そしてついに小説の末尾にいたると、読者は首をかしげたくなるような一文に出会うことになる。語り手の「私」は、「ただこの上の願ひには、このこわれ指環がその与へ主の手に依りて、再びもとの完きものと致さる事が出来るならばと、さすがにこの事は今に……。」と、語り終える。

字義どおりに解釈すれば、こわした指環が完全な形にもどるには、別れた夫がいまいちど私と一夫一婦の契約を結びなおし、完全な結婚を履行する必要があるのだ、と言っていることになる。読者によっては、それは別れた夫への未練ではないとか、または、どこまでも夫を改心させようと

思う気丈さのあらわれであろうとか、さまざまな解釈が出てくるところだが、どちらにしても「私」の語りには自虐的な響きを感じられる。

思うにこの蛇足めいた一文は、この小説のプロットが二つの軸で構成され、その両方の間でつじつまを合わせさせようとする語り手の、強迫観念のなせるわざではないだろうか。すなわち一つの軸は、一夫一婦の実現を女権論として押し進める主題の軸、もうひとつの軸は、その主題を一個の指環の完全形と不完全形というイメージの違いによって表象させる表現技法の軸である。

語り手は指環を契約の徴表とするイメージ効果をもって、最初からいびつな指環を高く掲げて口火を切った。そしていびつさの原因はあげて夫にあると非難し、そのような筋書きで結婚破綻物語を語り進めたのだった。指環のいびつな形は、いまは不完全だがいつかは修復されるはずの完全な形を、つねにダブルイメージにしてまつわらせずにはおかない。そのようなダブルイメージをまつわらせる一個の指環を介して主題軸（一夫一婦の契約破綻から契約の成就の可能性までを問う）を追うかぎり、必然的に契約成就の相手は私に指環を与えた夫その人でなければならなくなる。かりにこの物語が、結婚相手を変えて別の人物と新しい契約を結び直す話だったら、はじめからこの小説は存在しなかった。一夫一婦の主題の追求だけであるなら、相手を変えて実現することは不思議でも何でもない。しかしこの小説のヒロインは、結婚の失敗を忘れないために、夫から贈られた指環をこわしてまでもはめつづける女性なのだ。そんな女性がいいたい現実にいるだろうか。こんなふうリアリティを問い始めると、この小説にはかなりおかしいところが出てくる。

したがって「この小説」は、あくまでも一夫一婦制の結婚制度の実現を迫る主題軸にそって、テーマ小説として読まなければならない仕組みになっている。

そうなると末尾の一文は、「私」の自虐にみえようと未練に感じられようと、語り手の「私」が女権（一夫一婦制）の成就という主題を、指環の

イメージ効果によって形象化し、そしてその主題と方法を論理的に整合させようとするかぎり、いかに奇態だろうとこのような結末に到達せざるを得ないだろう。これは、もともと主題とイメージ技法の二つの軸の間にズレをはらむこの小説が、プロット上の無理を押しつめてまでもつじつま合わせをしようとした結果である。山口玲子の調査によれば、豊子は満年齢一三歳で京都府女学校師範諸礼科を卒業するという「超秀才ぶり」を發揮した女性²⁾だったが、頭脳明晰な秀才型の弱点が露呈したとみるべきだろう。ここで危惧されることは、このような論理の優位によって人間（とくに女性）の感情を抑圧しかねない事態である。

この小説は、女権の主題を指環の表象効果に託したが、むしろ指環のレトリック効果の圧倒的な威力によって、人間感情の綾を水面下に沈めてしまいかねないおそれを感じさせる。

6. 「こわれ指環」(3) 「歓楽」への視線

一見すると「こわれ指環」は、指環のイメージと契約問題で覆い尽くされたかのようだけれども、前稿でもふれたように、ひとつだけその傾向を脱してテキストがほころびる箇所がある。テキストはそのほころびのあわいから、彼女がかすかかにはあるもののこの悲劇のなかで「楽しんだ」ことがある、と仄めかしている。これは、契約の履行をひたすら夫に迫るテキストの闘いの表層から見落とされてしまいそうな、ひそかな「幸い」の夢の痕跡をとどめている。

「私」は、父に命令された縁談を断れないと諦めたとき、どうしても結婚するしかないのなら見合いはしても無駄だろう、と見合いを断った。けれども離婚してからその功罪は幾通りにも反省された。あのとき見合いをしていたらこんな男と結婚しないですんだかもしれないが、しかしたとえ見合いをしたとしても、あのときの私は家族以外の人との接触を極力さけるような家庭教育をうけていたから、「先方に顔を見らるるばかり」で相

手の人柄を見抜くことなどとうていできなかつたにちがいない。けっきょく見合いはしてもしなくても、結果にかわりはなかつたのではないか、という反省に落ち着いていく。

こうしてテキストは、当時の女性たちが家庭の内外で受ける女子教育一般が、いかに女性から主体性を奪い取っていたかを浮かび上がらせるのだが、実はそれにとどまっていない。注目したいのは、次の言葉である。

ですから、たとへこの時見合ひを致しましたところが、やはり何も私には分からなかつたので、なまじい極まらぬ前に見て、とやかく心配致したよりも、むしろしばらくでも、嫁入りはいやおもふ内に、もしやどういふ人かと幽かにポーッと楽しんだところもあつただけが、まだしも幸いだつたかと、せめてもの思ひ出して、あきらめておりますのです。
(下線江種 以下同じ)

見合いをせず、結婚するまで相手を見なかつたので、結婚と相手について勝手に想像する楽しみを味わった、と「私」は述べる。それが彼女の結婚離婚の経緯を通じて味わった唯一の「幸いだつた」と言う。幻想された楽しみがどんなものだったか、具体的にはなにも報じられはしないが、しかし「私」が唯一「楽しんだ」とわざわざ報告してあるこのくだりは、言葉は少なくとも意味は重い。

ここは、契約という法の追求の主題からも、指環の表象効果をねらう手法からもはずれた領分である。そして確実に、男と女の接点にはぐくまれる感覚的な快樂の層に触手を延ばしている。そして広い意味でのセクシュアリティのあらわれでもある。世間知らずで、嫁入りを先送りしたいと思う女性であっても、やはり結婚に楽しみを幻想した、という証言になっている。結婚それ自体を、まず喜ばしいこととして期待する想像力が感性と渾然一体化していて、それがすなわちひとつの社会の文化的な共通感覚として、「私」の内面にも根を下ろしていたということが、この数行によって言外に表明されている。

前稿でふれたように、植木枝盛³⁾は婚姻の目的の第一として、異なる性

が対になることによって得られる「歓楽」をあげていた。その結果、子をなして後代に子孫を繋ぐことができること、それを第二としていた。この歓楽は、いうまでもなく、生物的な本能に限定されたものではない。文化的に学習されたものだった。そしてこの目的を安定的に成就するために、手段として一夫一婦の婚姻の契約が守られなければならない、と植木は述べていた。歓楽と契約の関係は、目的と、その成就のための手段の関係にある。契約は、なによりも結婚の歓楽や次世代育成を支えるための必須の要件に位置づけられていたのだった。

植木が考えるこうした結婚の楽しみや幸せが、「こわれ指環」では、まだ相手を知らない短い婚約期間だけにしか存在しなかった特異な体験として、描かれたのである。つまりは結婚生活の期間には、楽しみや幸せがまったくなかったという事実を対照的にきわだたせつつ、テキストでは結婚の居心地悪さや楽しみのなさを語るエピソードを累積したのだった。

だが、その不幸が怒りをはらんで訴えられるとき、とうぜんその怒りには、結婚の楽しみへの期待がかなえられなかった不満が込められている。そしてその怒りのなかには、語り手の「私」の主体が込められている。清水豊子が敬愛した植木にならえば、一夫一婦の「契約」は、「歓楽」のために履行されるべきなのであり、その意味での「歓楽」へのまなざしが、わずかではあっても「こわれ指環」には伏在している。

だから今井泰子が、「こわれ指環」の語り手が愛を話題にしないことを、「そもそも日本の伝統的結婚に愛情は不要であった」⁴⁾からだと断定するのは、片面の指摘にとどまっている。その時代の社会全体に、愛情とともにある楽しみや歓楽が女性の結婚に欠けていたのは事実だが、だからといって「こわれ指環」の私にそれが「不要」だったわけではない。愛情とともに楽しむや歓楽への妻の願いは、おおむねテキストの表層では抑圧され沈黙の底に沈められているが、そのような抑圧によって結末の一文のようなきしみを残すほどののだが、それでも確実に存在していたのだ。

外崎光広によると、一夫一婦制結婚が定まるまでの法的論議は大変難航

した⁵⁾。ましてや、結婚が一夫一婦の契約関係であるという当事者間の合意の成立となると、困難きわまりなかった時代のなかで書かれた「こわれ指環」だった。しかし楽しみを積極的に想像する能力を欠いたものが、楽しみを奪うものを撃つことはできない。楽しむことへの欲求は深く生きることへの欲求そのものなのだから。

「こわれ指環」のテキストには、「女権」の主題の背後にもうひとつ、「歓楽」の主題もまた緊張をはらんで伏在し、それは後述するように、のちにこの作者が紫琴と名のって書く小説群のなかで、解き放たれていくことになるだろう。

7. 大井問題 屈辱の女性身体

「こわれ指環」を書いた頃、清水豊子は女権論者として、また自由党党友として意気軒昂だった。「女傑」の風格があったとさえ伝えられている⁶⁾。一八九〇年七月に公布された「集会及政社法」に抗議して「何故に女子は、政談集会に参聴することを許されざる乎」(8月)を、一〇月に公表された「衆議院規則案(女性の傍聴禁止)」をはげしく批判して「泣て愛する姉妹に告ぐ」(10月)を、ともに『女学雑誌』に発表し、東奔西走の活躍ぶりだった。「こわれ指環」は、それらの明快な女権論の勢いを、そのまま小説に移していた。清水豊子の一八九〇年は、いかにも爽やかにすべり出したかにみえた。

けれども快適なリズムはとつぜん途絶える。

このあたりのことは、山口玲子の独自の調査資料を用いた緻密な考察にまさるものはない⁷⁾。山口は、自由民権運動から自由党結成にいたる過程での、右の議会派と左の民衆派との対立を背景に、豊子の行動を浮き彫りしている。一八九〇年一二月、帝国議会が開院すると自由党の抵抗姿勢の脆弱さが露呈し、翌年二月頃、豊子は自由党党友として、最後の期待を左派の大井憲太郎に寄せて会見し⁸⁾、あるときアクシデントのようにして大

井によって妊娠した、と山口は読む。

いうまでもなく望まない妊娠である。時代は、妊娠する能力をもつ女性身体に、富国強兵の国是にもとづいた人口政策により、国民（子供）の生産という性役割＝母性神話を強制した。女性は身体にそなわった性的機能のために、産む身体としてジェンダー化された。妊娠・出産を女性自身が自己決定することなど論外だった。だから墮胎は刑事罰として懲役刑に定められた⁹⁾。望まない婚外の妊娠は、墮胎して服刑するか、極秘に産んで世間を偽るか、婚外子とともに差別を引き受けるかしかなかった。

推測するしかない豊子と大井の経緯だが、一つの根拠として山口があげる間接資料として、『女学雑誌』社の同僚でクリスチャンだった山月川合信水に豊子が宛てた、四ヶ月足らずの間の六通の手紙がある¹⁰⁾。手紙は山口によって紹介されたもののほかにまだ数通あるというが、山口が実際に読むことができたものは六通だけという。

どれも長文の手紙だがそれでも抄録だという。四月に父の病気の報で京都に帰った直後に書かれたもので、編集業務の手配を山月らの編集者たちに依頼する内容である。豊子はまだ妊娠に気づいていない。五月早々、「小妹今日かかる困難なる境遇に陥らんとは夢にも思ひかけず候ひき」（1891・5・1）と、ようやく身の異変を知り衝撃を受ける。五月二〇日に休職の手続きのため上京、巖本善治をはじめ編集仲間に出会った後、長い休暇を取って京都に帰り、それからしたためた手紙にいわく、前年来、女学雑誌社の人たちによって豊子の中に「廿余年未だ知らざりし愛」がはじめて「芽生え」たと書き、いま「おちぶれて」落魄に苦しむ身になって、雑誌社の同僚の「愛」がひとときわありがたいと感謝する（5・28）。次便に、父の命で岡山の田舎に身を隠すことになったと伝え、親族に迷惑をかけている立場を思えば、父の決定もやむを得ないとしながら、やや自虐的な自己批判をしている。「私の如く兎角奇を好み磊落疎放などといふ事を快とし、よしなき諧謔に出て言詞を弄しなど致たる」ことを「只々」「悔ひ候」（7・2）という。つい先頃まで自由闊達に東西を動き回った女性が、

不本意な出産のために身を隠さなければならなくなり、気弱になって打ちひしがれている様である。だがその次には、「妹争でか久しく不本意の境遇に安んずべき、如何にもして再び出京いたし」(7・30)と、将来を見据えた再起の構えをみせ、あえて自らを励起している。

これらの書簡に一貫している豊子の姿勢は、女性の身体をもったばかりに女性だけに起こった事態に正気を失いそうになりながら、しかしけっして大井とのいきさつを語らず、大井との結婚を望まず、被害者意識もみせないことだった。それは、「兎角奇を好み磊落疎放などといふ事を快とし、「女らしき女」にならず女だてらに壮士風を衒った自分の行動の必然の結果として、その責任を自分一人で負う姿勢だった。

大井とのかかわりは、山口玲子が解説するように、つかの間であれ社会的正義への情熱と共感が性行動と交錯した可能性が高い。しかし、婚外の妊娠が、女性を社会から失墜させる最大の理由でありえた時代には、たとえ最初に個人的な愛に近い情熱があったとしても、あとになると悔いのみが残って、愛は憎しみに変わり易い。かりに今日的なセクシュアル・ハラスメントの問題構成に照らすなら、これを事後的にレイプと主張できる可能性は十分ある¹¹⁾。しかし当時は、言説としての女権論は存在しても、その女権という人権意識の中には、レイプを女権侵害とみなす考え方は、兆候としてさえまったく存在しなかった。闇の中をくぐりぬけるようにして、婚外妊娠をした女性たちは生きのびなければならなかった。女性は、理解ある親族や友人に恵まれたばあいにかぎって、相手とのかかわりを断ち切り、事件について固く緘黙し、事件そのものをなかったものとして葬り、そのうえでようやく社会の中での再起に賭けることができた。

大井問題は豊子に思い知らせる。明治政府が制定した墮胎罪という性の制度化のもとで、女性が出産する身体的存在として、母性として国家によって定義され限定された存在であることを。自己決定の余地のないそのような性の制度があるかぎり、女性は男性と対等な人権・女権をもつことはとうていできない。出産を拒否することができない世の中を生きるとき、

かつて闊達聡明な女権家だった清水豊子と、そののち望まない妊娠をしてしまった女性身体としての清水豊子の間には、超えがたい断裂が走るばかりである。豊子の挫折の重さは、やむなく法に従い、社会に向かって自身を偽らなければならなかったところにあった。

かつては主体的に生きようとしたはずの行動を、のちになって軽拳がもたらした恥だとみなし、だれよりも自分自身をそう言いくるめて保身しなければならなくなると、豊子はなによりも男性に対して臆さざるをえなかった。だが後年、「紫琴」を名のって書いた小説群には、裏切られた恋の愛憎に生きる女性が多数登場し、それらの女性をとおして大井事件を反芻しては、肉付き豊かな女性をかたどることに成功したのである。

8. 古在由直と 「一青年異様の述懐」の異様さ

秋、男児を出産して兄謙吉の戸籍に入れ、一八九二年になると豊子は決意どおり上京した。しかし多くの日々を心身の後遺症で病みがちだった。その頃、大井が入院中の豊子に出した手紙が景山英子宛とまちがって封入された事件が起こり、豊子の出産を英子が知って、豊子は英子からはげしい恨みをかうことになる。

そんななかで新しい男性が豊子の前に現れる。『紫琴全集』に資料「青春書簡」として付載された豊子宛古在由直書簡によると、豊子は四月には豊子の兄謙吉の職場を訪ねて同僚の古在由直の面識を得ている。ただちに古在は豊子に積極的な関心をよせ、豊子に矢継ぎ早に手紙を送る。東京帝国大学農科大学助教授の由直は、いかにも自然科学の学者らしく、真相究明型の文章を書き、時には豊子を正面切って問いつめる。けっして甘い男性ではなかった。

かつてあれほど明快な女権を主張した豊子が、由直の書簡からうかがうかぎり、古在に対しても警戒的な姿勢をとった様子である。二番目の古在書簡（1892・5・3）では、まだ豊子の結婚歴などを知らない古在が、豊

子の言動をいぶかしがり、豊子という人間を四点¹²⁾に絞って問いただし、理解しようとしてつとめている。そのなかには、「一 男子の不徳を責むの酷にして急なること」や、「一 しばしば婦人を男子より一器械として玩琅視さるるの事を口外せらるること(例エバ妻八良人ノ為メ娼妓的(二)視ラル云々ノ如キ)」がある。ひきつづいて由直書簡が引用している豊子の手紙によると、豊子は自分のことを「失意落魄の極に陥り、身傷けられ名汚さる」と満身創痍の女として自己紹介したことがわかるが、その点についても古在は質問する。

秋頃豊子は『女学雑誌』に復帰した。そして古在との結婚の決意を迫られていた頃、「一青年異様の述懐」(『女学雑誌』1892・10・5)を同誌に発表した。豊子の小説の中でめずらしく男性を主人公にした掌篇である。ここで豊子は、「こわれ指環」と同じ「つゆ子」を名のる。ちなみに「つゆ子」の筆名はこのあとでもう一度だけ使用される。それは筆を折った最後の断章「夏子の物思ひ」である。これら三つに共通するのは、どれも豊子の個人的な体験や思いにかかわる題材を書いていることだ。そう気がつくと、「つゆ」とは涙の露を連想させる筆名のように思われてくる。

ともあれ「一青年異様の述懐」は、「こわれ指環」が女の私語りの形式をとったのを裏返し、若い男性による自己語りとして、次のように書かれている。

青年「予」はなぜ、多くの女性の中でほかならぬ「彼女」だけを熱愛するか。かつては「婦人を土介視」「悪魔視」していた「予」は、彼女に会ってはじめて女性への「敬」の念をおこした。美しいだけの女性なら他にいくらかもある。予が「彼女において、異様に感ぜしところのものは、かれが身より、放つところの靈光にてありき」。その「靈光」ゆえに、いまや「予てふ人間は疾くに亡び」てしまった。彼女の「靈光」によって予は骨抜きにされたというのだ。しかしその女性は、「かつて、清からぬ男子によりて、その性情を損なはれ。それより一般の男子について、全く絶望せるが故」に、「とうてい、何人とも」「婚姻をなさず」と決意していると聞

く。予は「いかにせば彼女が、身辺を纏へる漠々たる愁雲を、払ひ得らるるか」と考え、彼女と対等な「一親友」として力を尽くしたいと申し出た。かりにそのことにおいて、予以外の友のほうに適者であるのなら、彼に親友の立場をゆずってもよいと思うほど、予は彼女の幸いを願うものである。

このように青年は、女性によって「靈光」にうたれ、女性の中にも尊敬すべき人物があることを知った。またその女性を「憂愁」に閉じこめている不幸な男性体験を払うべく、男性の「親友」として交際したいという。女性に向って親友として対等に交際したいなどと言えた青年は、当時は異例の存在だった。豊子の前には、わずかに北村透谷の「厭世詩家と女性」¹³⁾があるばかりだ。透谷は、豊子が上京して古在と知り合うわずか二三ヶ月前にそれを発表して、豊子は入院中の病床でそれを読んだはずである。透谷は、欧米の男性詩人たちの詩精神をかき立てる恋愛のパワーを賛美しつつ、しかし同時に、その恋愛をする男性詩人たちがきまって相手の女性を悲運に陥れる自己中心性も論難した。男の書いたこのロマンティックな恋愛論に、島崎藤村¹⁴⁾をはじめ当時の若き文学青年たちはこぞって魅了された。

かつては、透谷の恋愛論が掲載された『女学雑誌』の主筆だった清水豊子が、恋愛の新しい風が男性文化の中から吹きはじめたことに感慨がないはずがなかった。遅れること八ヶ月、豊子は女性の書き手「つゆ子」を名のり「一青年異様の述懐」を書いた。「厭世詩家と女性」にでてくる男性たちの恋が女性の被害者をいつも産出したのとは対照的に、豊子は、女性の身に同情し「親友」になろうと説く男性の恋を描いた。たしかにその男性は、その時代にしてはまさしくタイトルの如く希有にして「異様」な青年なのだ。しかし作者「つゆ子」は、その青年に恋される側の女性の反応には、まったく目を向けていない。青年は言葉を返さない神の前で一方的に神を言祝ぐかたちである。

この小説が清水豊子と古在由直をモデルにし、青年が古在由直で、「靈光」云々と絶賛されている女性が豊子に比定されることは断るまでもない。

じっさいに古在は豊子の前でこのような言葉を口にしたのもあろう。十余通の古在書簡には、「靈光」という言葉こそ見当たらないものの、小説中のそのほかの言葉はたいてい探し出せるのだから。

しかし書簡の言葉は、小説のように甘い文脈ではなかった。およそ恋文の域をこえていて、よほど気強い女性でもないかぎり、このような手紙に太刀打ちすることはできない。それなのになぜ豊子は、男性が己を失うほど女性を熱愛する小説に仕立てて、自分たちのことを書いたのか。たしかに「厭世詩家と女性」への関心もさることながら、男性関係の傷で心身を病む豊子は、古在の愛が受け入れるにあたいすることを、まず自分自身に納得させるためにも、恋する男の心を男性自身によって語らせて吟味する必要があったのではないか。

出会ってから結婚するまでの約半年、豊子が古在にどのように向き合っていたのか、古在の書簡から推測するしかないが、古在が積極的に豊子を説得して結婚に合意させたことはまちがいない。それまでには、豊子は男性問題で重なる挫折を怖れるあまり、男性に疑い深くなり、古在をして「嘔吐に堪えざらしむ」と憤激させるような、屈折した「いやみ」な手紙を書いたこともあった（日付不明、5・3以前）。婚約が成ると、古在の周辺から豊子との結婚に反対する雑音もあがった。古在に説得されてようやく結婚に合意した豊子にしてみれば、古在の側でブレーキがかかれば、確実に結婚にこぎつけないかぎり不安を覚え、結婚を急ぎたくなるのも無理はない。だがこの段階になると古在はもう、豊子が「一青年異様の述懐」で描いたような、恋人を崇拜するような男性などではない。手紙は、古在が確固たるマイペースを持し、現実的で冷静に事を処し、豊子へのリーダーシップを握っていたことを示している。

由直の手紙から浮かぶ由直の像と、豊子が描いた小説の青年の「予」との落差は、驚くほど大きい。その意味では、男が恋などしなかった時代に青年がみせた女性理解の「異様」さばかりでなく、古在由直を、一途に恋する男としてデフォルメしなければならなかった豊子自身の、個人的な動

機や書き方のほうにむしろ、痛ましいまでの「異様」さがあったというべきではないか。

現実の豊子は、日付不明の最後の手紙によると、「結婚の発表」を意味する「契約」(婚約の意 - 注江種)を、早急に「結婚実行」=「契約の履行」(挙式 - 注江種)に至らせるよう、強く要求した形跡がある。婚約以後に豊子が古在に言えたことは、「こわれ指環」の頃から引き継いだ一夫一婦の契約とその履行、というきわめて実際的な課題だけだったかのようだ。

「一青年異様の述懐」を書いていたとき、現実の清水豊子は結婚の「契約」や「履行」といった約束事に関心を集中し、かつて「こわれ指環」で見せた「歓楽」へのまなざしなど、どこにも痕跡はない。その小説は「恋愛」を書いたのだと、あらかじめ作者「つゆ子」は自注をつけている¹⁵⁾にもかかわらず、豊子は由直に「異様」な一途さで一方向的に愛されることを、新時代の恋愛だと信じたのだろうか。あるいはそう信じるのが豊子の、女のささやかな「歓楽」だったのだろうか。

同じ筆名で書いた「こわれ指環」と「一青年異様の述懐」はいろいろな意味で対照的である。かつて、離婚を決行したいきさつを女性自身が雄弁に語り、世の中の女性全体に代わって男女の関係性の非対称を批判した小説の書き手は、いまや、女性が男性によって一方的に語られ解釈されるばかりで、恋人たちを取りまく現実的な背景もなく、女性自身の言葉もないような、脆弱な小説を書く人と化している。この小説では、女性は語る人としての主体を喪失しているばかりではない。聞く主体としてさえも女の存在は危うい。

古在と出会って結婚するまでの豊子を考えて、女性がジェンダー化された身体存在として、ジェンダー化された歴史の時間を生きなければならぬとき、どれだけ男性が女性を敬愛し理解したとしても、女性の主体の疎外は避けられなかった現実が、ここに歴然と浮かび上がるだろう。

9. 紫琴（1） 「今様夫婦気質」、近代家族の原理

一八九二（明治二五）年秋、古在由直と結婚してからの豊子は、夫を中心とした家庭の人となり、ときおり随筆のたくいを執筆する程度だった。しかし由直が一八九五（明治二八）年三月から一九〇〇（明治三三）年七月までの満五年留学した間、京都の由直の実家に移転して姑と同居し、留守家族の不足がちな家計を支える名目を得て、勇躍「紫琴」と号して一〇篇の小説を書いた。紫琴が小説家と呼ばれる資格をもつとしたら、この活動期があつてのことだ。執筆は夫が帰国する直前まで、ゆるされた時を惜しんでつづけられた。

これまで紫琴の小説のうち主たる関心と呼んだのは、「こわれ指環」以外では「誰が罪」（『世界之日本 1897・7）「移民学園」（『文藝倶楽部』1899・2）のような社会性のあるものだった。後者は、被差別部落出身の女性の結婚の行方に挑戦した社会性・政治性、現実的に有効な対処を提示した積極性（新天地北海道に移住して「移民学園」をつくり、社会に不満をだく青少年を集めて教育事業をおこすこと）が、高く評価された。被差別者を国内の辺境に移民させて新天地を開拓させるこの小説は、島崎藤村の『破戒』の先蹤とも目された¹⁶⁾。

しかし本稿は、「こわれ指環」を出発点としてその展開を追うことを目指しているので、女性表象にかかわるテキストとして、掌篇「今様夫婦気質」（『文藝倶楽部』1897・7-8）のほか、小説では「葛のうら葉」（『同』同・5）、翌年の「したゆく水」（『同』1898・2）、翌々年の「移民学園」（『同』1899・2）をえらび、「こわれ指環」から「紫琴」時代の文学の営みまでを繋いで読み解きたい。とくに「葛のうら葉」は、プロット面でも「こわれ指環」との相関性があることは、すでに指摘しておいた。（ちなみに、「こわれ指環」では正妻が語り手の座を占めたが、「葛のうら葉」では、紫琴文学の転換を象徴し、正妻の裏側の愛人がそれに代わる。）

掌編「今様夫婦気質」は、当時の目新しい結婚風俗を夫婦二態とし、西鶴ばりの小見出しをつけて諧謔的に書いた。短章ながら、近代の結婚制度が生み出す矛盾の核心を突いて、紫琴の特異な観察力を発揮している。一態は、「こわれ指環」にはなかった女性の職業と家事育児労働の現実的な生活問題に、目が向けられる。第二態は、性のダブル・スタンダードの問題なので、「こわれ指環」からの連続面もある。どちらも、金銭が巻き起こす悲喜劇に極まっていくところ、結婚事情をとらえる紫琴の眼はかつてない醒め方をみせる。

「素麺は漬しても漬しの利かぬ学者の奥様」の小見出し付きの小話では、高学歴の共働きの夫婦が、男女平等を徹底的に実践するが、滑稽にみえるほどのその徹底ぶりは、子供の誕生によってあっけなく挫折する。役所属官の夫と学校教師の妻は、夫婦だけで子のない間は、座敷に机を並べて「書生交際」をするほど、万事にわたって「同権交際」を実行した。が、いったん子供が生まれると、人件費・育児費などで、たちまち家計逼迫。思案の末の夫の提案は、収入は減るが働くのは夫だけにして妻は退職、乳母・老媪・下婢を解雇し、家事育児のいっさいを妻が引き受けるというもの。この提案を、お金の問題として迫られた妻は、合意するしかない。

いったん夫婦のなかで家庭外労働と家庭内労働を男女の性別に振り分けるとどうなるか。分業化は即男女同権交際の終幕である。学者妻は学問はあっても家事が苦手、夫は一家の大黒柱となって主人顔をし、日ならずして妻を軽んじる。素麺の作り方もわからなくて困惑した妻がパニックを起こしたことから、夫は妻の苦衷を知ることになるけれども、それで「素麺は漬しても漬しの利かぬ学者の奥様」と題される所以だが、しかし妻の教職復帰が決定したわけでもない、笑いに紛らせての曖昧な終わらせ方である。

紫琴は、女子教育が進めば進むほど、対等な夫婦関係をつくるうえで最大の障害は、育児にかかわる労働量とそれを他に委ねた場合の莫大な人件費だと看破する。言外の主張は、育児の難問ゆえに、これが解決しない以

上、男女同権交際など将来にわたって永遠に不可能だと、早くも予言していると聞こえる。しかし学問だけで家事ができず、近代家族の性役割分業になじまない妻であっても、女性として容認するおおらかさはある。女性の多様性への配慮といえよう。結論的には、夫婦間の男女平等の基盤づくりには、双方の能力に見合った労働と収入が必須の要件だということだ。二一世紀日本の著しい少子化のルーツは、もはやここに兆している。かつては墮胎罪がそれを防いでいたにすぎないのだ。

ここに点描された性別による家族役割こそ、近代家族の成立の原理であり、近代のジェンダー・システムの基盤だった。紫琴を名のった古在豊子は、女性が性差を超えて求める知的探求心や職業をもつ欲求と、国家が制度化した良妻賢母の性役割の矛盾を、古在との結婚をとおして、いっそう深く実感する。しかし、豊子が古在との結婚の継続を選択するかぎり、けっしてその矛盾から解放される可能性はないことも真実である。女が働く欲求を断念したあとは、諧謔で対処するしかないともいうかのような趣が、この掌篇からひしひしと伝わってくる。

かつていくつかの論説文で女権論を説き、民権家の家庭内の男女平等を訴えたにもかかわらず、熱愛されて結婚した古在とともにつくった家庭でさえ、豊子は仕事を辞め、夫婦の平等とはほど遠い関係を生きなければならなかった。先走って言うなら、後になればなるほど、私的な結婚政治学や性の政治学の問題から、紫琴は目をそむけるようになる。目を向けてもお先真っ暗なだけだ。それならば紫琴としての豊子は、男性をストレートに批判する私的な性の政治の場から身を返し、その代わりに男性と共有できる大きな政治、すなわち「移民学園」のような社会的な差別問題に移っていくのも、当然の打開策というものだろう。

「当世夫婦気質」が紹介するもうひとつの結婚風俗は「約定証書の持腐りは、犬も喰はぬ喧嘩の本色」という。こちらには紫琴の思い入れはない。たんなる小話に仕立てたもの。玉の輿にのった妻と女遊びに目のない高等官の夫の組み合わせ。妻はまさかの離婚に備え、高い代償を払う「約定書」

を夫につくらせた。このような現象は当時そここにみられたのであろう。次にふれる「当世二人娘」でも「約定書」が話題になっている。予想通り、夫の女性問題が起きたとき、双方が「愛はいつでも金だけは」という立場で駆け引きをして、曖昧な妥協でとりあえずは一件落着する。明らかに樋口一葉の「十三夜」の世界が相互テクスト的にちらつく。自己抑制の利いた「十三夜」のお関が、計算高いがさつな女性に置き換えられて、同じ題材が語り直され、語り手は、第一話の夫婦に対するのとはうって変わり、金銭づくでことを丸め込む夫婦には冷たい。

10. 紫琴(2) 「葛のうら葉」、もしくは情念の解放

ほんらい真面目だった男性が、女性の助力を借りて立身出世できることを知り、梯子でも登るように女性を踏み捨てゆく陰で、女たちは死を思うほどの苦渋をなめることがある。紫琴が見つめた近代日本の社会は、立身出世の自由競争原理によって、競争に参加する男たちの裏側には、山ほど女の悲劇を生みだす社会だった。「葛のうら葉」はそのような現実を語っている。

女主人公は、幼少期の父の死による生活苦ゆえに、自己抑制的に形成された性格のもち主である。長じての恋でも、ひたすらに男を立てる控え目な性格にわざわざいされ、男に裏切られつづけ、文字通り薄幸の生涯である。

けれども別の角度からこれを眺めれば、この作者には画期的なことだったが、「葛のうら葉」の女性ほど、感情の揺れ巾に身をまかせて生きる女性が描かれたことはない。女性の行動を、単に意志や論理だけで割り切らず、男への愛憎にひかれるあまり、割り切れない感情や狂気を激しく生きる姿にまで踏み込んで描いている。

ヒロインの母親は、衰亡した家の再興を娘に期待し、内職に励んで娘に教育を受けさせるが、娘は母一人に苦勞させるのに忍びなくて、義務教育の尋常小学校だけでやめ、母とともに内職をして、ついに下宿屋を開業す

る資金を得た。その下宿に九州から上京した格別に貧しい学生がいて、娘と母は田舎出の無口で真面目な学生の人柄を愛し、自分たちの栄達の夢を彼の上に託して、いずれ娘との結婚を想定しつつ、惜しみない経済支援をする。ここまでは彼女たちの労苦は報われ、娘の恋も実ったかにみえた。

ところが、母娘の肩入れで一歩ずつ出世階段を登るごとに、青年の野心は肥大し、娘は出世階梯の手段とみなされて正式な結婚は限りなく先送りされる。その裏で、彼はもっと条件のよい女に身を移しては、やはり自分の野心のためにそれを利用し、その利用価値がなくなると捨て去るといったことを繰り返す。ヒロインの娘は母に死なれ、男の心を取り戻したいばかりに、法に触れる行動さえはばからず、ついには行きづまって自殺をはかる。

このように不幸悲惨な筋書きをたどると、「不幸悲惨は決して女子の天命ではない」と言って「こわれ指環」の女権論者を立ち上がらせたのは、この作家の本意だったのかと疑わしくなるほどだ。けれども不幸悲惨のあと「葛のうら葉」のヒロインは、「こわれ指環」の女権論でこそないが、こんどはキリスト教によって自分を立て直すのだ。

すなわち、自殺しようとしたところを彼女が恋いこがれる男の古い友人に見つけられて救われ、その男性から聖書を与えられてキリスト教を知り、精神的な救いをえることができた。しかも自身が信じたキリスト教の知の力で、今度は墮落した恋しい男を救い出してやりたいと願う。

今はこれ（聖書 - 注江種）に心の煩ひも跡なく拭い去られたれど、さすがに大名縞の頃の、浅木様のみは忘れられかねて、今はよしその人としも思はれぬ方様にあれ、せめてはこの書見せまして、もとの浅木様に立帰らせましたしとの願ひ、ともすれば起こるを、あながち清き心よりの望みとのみ思はれぬ一ツぞ今はの憾みなる……。

「葛のうら葉」と「こわれ指環」のプロット上の類縁性は、もはや明らかだろう。一夫一婦を守らない男性を原因とする女性の不幸悲惨な結婚の実態があり、そして不幸悲惨から抜け出すための宗教的なイデオロギー装

置を獲得し、不幸悲惨をイデオロギーの力で相対化したと自負する女性は、男を憐れむべき迷妄の徒とみなす位置へと舞い上がっている。その高みから、そのイデオロギーを武器として、男の迷妄を払ってやりたいとする。ともすれば女権論がキリスト教に入れ替わっただけのように見えるかもしれない。

だが「葛のうら葉」は、そのあとへさらに意味深長な一文を置いて小説をしめくくことに注意したい。こんどは「こわれ指環」の末尾のような蛇足ではない。重篤な病床でのヒロインの唯一の心残りは、自分がまだ愛されていた頃の純朴な好人物だった頃の青年に立ち帰らせたいとの願いだと言いつつ、しかしその本意が裏の意味をともなっていることを自覚しているのだ。

それはヒロインが青年と共有した歓楽への懐旧の念であり、その時が二人の至福の時だったからである。たとえキリスト教を信じても払拭することのできない情念の飢えがあることをテキストは見据える。そのことがキリストの教えに照らして後ろめたいとしても、彼女は感情の迷いは迷いとして包摂するのだ。だから彼女は、自分の願いが「清き心」ではないとしている。生涯の末期において言わんとする正義にさえ、男を他の女性から奪い返したい執着心が顔をのぞかせてしまうのだ、と告白する。

紫琴はもはや、表の社会に向かって正面切ったり、明快に正義を語ったりしない。愛人という正妻の裏側の女性に照準を定め、彼女の行動の裏側を支配する感情の威力に目を凝らしている。タイトルに「葛のうら葉」とあるゆえんである。タイトル「葛のうら葉」はいうまでもなく浄瑠璃「葛の葉」に由来する¹⁷⁾。

このように「こわれ指環」から遠くへだたる変化は、すでにこの小説の冒頭の自己語りのトーンで決定されていた。紫琴は開口一番、人間を生かす根源は愛憎に迷う心にあった、と挑戦的な宣言をおこなう。

憎きもかの人、恋しきもかの人なりけり。我はなど憎きと恋しきと、
氷炭相容れぬ二つの情を、一人の上には注ぐなる。憎しといへばそ

の人の、肉を食みても、なおあきたらぬほどなるを、恋しといへばその人の、今にもあれ我が前にその罪を悔ひ、その過ちを謝しなむには、いづれに脆き露の身を、同じくはその人の手に消えたしとは、なんといふ心の迷ひぞや。さあれ我はこの迷ひ一ツに、今日までをしからぬ命ながらえて、空蝉のもぬけの殻に異ならぬ身をも、せめては涙をやどす器としてだも保ち居たりしなれ。もしこの迷ひなかりせば我は疾くにかの人を殺さずんば、我自ら死しむたりしならむ。さるを死なず殺さず今日まで自他の身を完ふすること得たりしは、¹⁷美にもこの迷ひ一ツの為にぞある。(中略)

身の生きて、こころの死にし昨日の我よりも、こころの生きて身の死なむ今日の我を幸ひに、われは年頃の憂さを感謝に代へて、せめては最後の念を潔ふし、汚れに染みし身の懺悔を、我と我が心に語りて見む。

自己語りする女は、いきなり、愛憎の「迷ひ」こそが自分を生きのびさせた、と「迷ひ」という闇の感情の威力を、確信をもって語りだす。女は末期においてもなお、憎んで余りある男に対して、おさえきれない未練の情をおぼえているという。そのような自己省察を女の基調に据えることによって、理屈ぬきに恋する女を、物語る作者に変身した「紫琴」は、徹底的に語りきろうとする。男の子のようにお家再興の夢をかけられた少女は、その夢を担いきれず、自身が同一化できる男性、田舎出で貧しく真面目だった無口な青年にあずける。いうまでもなくそれは一対の男女が一つの夢を共有する恋愛を生み、女性は恋する喜びを知り、喜びを追い求めるからこそ、愛憎に迷いに迷う。

理路整然たる女権論者清水豊子からは、想像できない「紫琴」への変貌だ。かつて大井事件の前の清水豊子は、自由民権派の女性論客として若い女性たちに忠告したことがある。「活世界の活物を活読し玉へ」¹⁸⁾と。この言葉を自ら実行するためには、世の裏側の体験と表の世界を「活世界の活物」として「活読」する苦しみの体験と冷静な洞察力が必須の条件だっ

た。豊子は紫琴として「葛のうら葉」を書いたとき、かつて自分が誇らしげに振りかぶって女性達に投げかけたその言葉を、惨苦の末ようやく自身自身のものにしたのだ。

しかもヒロインが語る懺悔物語は、「こわれ指環」のように、いびつな指環に目をとめる他人にむかって、気強く女権の目覚めを語って聞かせるのではなく、なによりもまず、迷妄の果ての死の病に伏す自身のために、「我と我が心に語」るものなのだ。明らかに語りは自閉的なモノローグをするかのような恰好である。だが、ほんとうはモノローグのふりをしているにすぎないのではないか。聞きたい人だけがそっと聞いて下さい、とでもいうように、語りの形でも語りの内容でも、紫琴は聞き手から超然と構え、自信にみちて自分の世界を世界の裏側から仮構しはじめる。

以上のような人間への迫り方は、この作者が、限りなく自己の体験に近い世界を語るときの名前「つゆ子」を離れ、新しく「紫琴」と名を変え、自己との距離を十分にとった題材で自身を相対化できるようになってから、ようやく可能になったのだった。

もちろんその背景には、女性文学において田澤稲舟や、稲舟との血脈を信じた樋口一葉の文学が切り開いてみせたように、恋に命をすてるロマンティック・ラブの人間世界が広がっていた¹⁹⁾。彼ら彼女らは、恋のために生きもし死にもする。稲舟や一葉はそのような人の情念のわりなさに、測沿を深く下ろしたのだった。

11. 文学界を去る 「移民学園」

「したゆく水」では、お互いにひそかに慕い合う男女がいて、結婚の可能性を間近にしなが、女は相手の男の家庭を守る義理を重んじ、ひいては男を生かすために、ひとり自害する。恋の物語の系譜においてみると、男女双方の思いが通い合ったはじめての小説である。女性は相手の思いを信じて心中さながらに自害するのだから、恋は成就されたことになる。こ

こまでくると、もう紫琴は恋愛小説を巧みに操作する作家である。

これまでの紫琴の小説は、たとえ恋が結ばれなくてもあこがれはロマンティック・ラブであったが、死によって恋愛が成就する「したゆく水」までさまざまなヴァリエーションをたどってきた紫琴にとって、恋愛小説は試み尽くしたことになるのではないか。あとは題材を変え、異質なプロットに挑戦するだけである。

このようなとき、出自が被差別部落の女性を描いて、恋と社会問題をダブルクロスさせた「移民学園」が書かれたのは、紫琴文学としては十分納得できる展開である。ロマンティック・ラブ路線を離れるために、思い切って挑戦した冒険だった。

ここではおもしろいことに、男女双方が社会的な危機に出会ったとき、男性の方が女性を思いやって出世欲をおさえ、男女ともどもに身が立つように英知をはたらかせているのだ。このような男女の関係を書いた作家は、近代日本には他にいないだろう。

父親に反抗して家出をし、放浪のすえに被差別部落の女性と結婚した男性は、妻が娘を残して早世してからは、転居に告ぐ転居で出自を隠し、娘を大事に育て上げる。娘は真相を知らぬまま才色兼備の女性に成長し、政界での出世を約束され要職にある有能な男性と結婚する。望みが達成できた父親は、娘の妨げにならないよう、妻と知り合った被差別部落にもどり、身を亡き者と決め、娘との音信を断つ。時経て、彼が死の床につくと、その友人の親切心から、娘に見舞いをうながす手紙が出される。父の現在と居所を知った娘は見舞いに旅立ち、ついた場所が被差別部落であることを知る。しかし父は娘婿が政界で失脚することをおそれ、娘の即刻退去を命じるが、結局娘は自分の出自を夫に知らせ、夫は政界よりも妻を選んで、政界を退く。そして新天地の北海道に「移民学園」を設立し、そこに、大志あるがゆえに不遇をかこつ全国の青年たちを集め、政治よりも重要な教育事業を興す。

紫琴は、一組の男女がこの世で協力し合い、将来を見つめて現実的に生

きる可能性をはじめて物語り、紫琴最後の完成作として、また唯一のハッピーエンドの小説を遺して文学界を去った。

小説家として「つゆ子」と「紫琴」の名を使い分けながら書いてきた一人の女性作家の水脈は、このようなものだった。恋にまつわる男の裏切りと女の執着、歓びと恨みにゆれる暗い迷妄への共感、死によってひそかにとげられる水面下での女の恋、さいごには愛する男女が力を合わせて社会に共同戦線を張り、地上の新天地で教育事業を企てる現実的解放策へと、男女の関係性を一步一步探り当てながら前に踏み出した。自由民権運動の中から出発した社会的正義を探求する精神は、紆余曲折しつつ、最後まで健在だったというべきである。

おわりに

自由民権運動の女性演説家として、公的な世界を憂え批評する、口で語る女として自己表現をはじめた豊子は、そこでは私生活の場で日常的にこうむっていた最初の夫からの精神的暴力を正視しなかった。しかしそれを矛盾として意識化し、私的な場に胚胎する男女の差別問題を、女性全体の問題として女権論へと論理化するとともに、離婚を選んだ。そのような私の場に対する省察が彼女を書く行為に向かわせる。一夫一婦制の実現を世に訴えた初めての小説「こわれ指環」は、そのような表現活動の一環だった。

しかし作家活動は始まったとたんに、婚外の妊娠というジェンダー・コードにふれ、挫折する。挫折から立ち直るかたちで、かねて理想だった一夫一婦制の結婚を、古在由直とともに実現してみると、その結婚がまたさらなる女権抑圧にほかならないことを知る。夫の留守の間だけ作家の顔を取り戻し、紫琴となって書いた世界では、一夫一婦制の実現を望んでも実現できない女性たち（「葛のうら葉」「したゆく水」）、一夫一婦制は実現

しても夫婦平等はかなわなかった女性たち（「当世夫婦気質」）が登場した。「こわれ指環」の理知の小説構成から、「一青年異様の述懐」という異様な小説を介して沈黙期にはいり、結婚生活の実態を見きわめて再び復活したときには、好人物の仮面の下に渦巻いている権謀術数を見抜くまでの現実直視の柔剛合わせた精神力感情力を育てていた。そして、末期においても愛憎を放下できないわりない情念についても、それを女性の現実として受容し、「活世界の活物を活読する」境位を手に入れた。「移民学園」では、一夫一婦は実現し、女性を家庭の中だけのとどめず、社会の一員とする可能性を探ろうとした。

しかし、紫琴における自由民権の初志は、むしろ自由民権運動における男性たちの政治意識に帰結したかのようなおもむきがある。すなわちそれは、初期清水豊子がおこなったような、自由民権の男性中心性を撃つという意味においてではなかった。

このことは、作家紫琴が後世に残した課題である。

このように作家としての全行程は短く、残された小説も多くはないが、男性社会のなかでの苦い体験にもとづいて、同時代の女性を語る多彩な問題意識とスケールの大きさは比類のないものだった。私たちはこの女性作家の第三ステージをみることができなかったことを、残念に思う。

紫琴より四年遅れて誕生した樋口一葉、六年後の田澤稲舟、一〇年遅れて誕生した与謝野晶子、一六年遅れた田村俊子、一八年あとの平塚らいてう、などとたどりながら私は思う。彼女たちはすべて清水豊子・紫琴の後継者だと。しかしあえて言うなら、彼女たちのもっと後から登場する女性作家達、紫琴の一七年後に誕生した野上弥生子（1885-1985）、三一年後の宮本百合子（1899-1951）、三六年後の林芙美子（1904-1951）などの登場で、ようやく彼女のかかえた女をとりまく公私二重の政治性の問題の後継者を彷彿できるであろう。彼女たちは、個人の生活の歓楽を尊重し、なお社会の矛盾をも見抜く目をもって文学にたずさわった女性作家達である。

私たちは、清水豊子・紫琴という作家を、成功と挫折を合わせて生きた

という意味で、近代女性作家群の先行者の位置に刻み残さなければならぬ。

注

- 1) 文教大学文学部『文学部紀要』第17 1号 2003年10月
- 2) 山口玲子『泣いて愛する姉妹に告ぐ 古在紫琴の生涯』(1977草土文化社)
- 3) 植木枝盛『東洋之婦女』(1889・9出版人佐々城豊寿、『明治文化全集』第一六卷所収)
- 4) 今井泰子「こわれ指環」解説(『短編女性文学 近代』1987おうふう)
- 5) 外崎光広『日本婦人論史(上)』p78～82
- 6) 『女学雑誌社』の後輩編集者川合山月からの聞き伝えとして、山月の子息川合道雄が著した『川合山月と明治の文学者達』のうち「清水豊子と山月子」による。この本は山口玲子『泣いて愛する姉妹に告ぐ 古在紫琴の生涯』(1977草土文化社)によって紹介された。
- 7)(2)による。
- 8)(6)の書では、民権運動の危機を感じた清水豊子が大井憲太郎と会見したと伝える。
- 9) 日本の墮胎罪は一八八〇(明治一三)年に制定、一八八二年施行された刑法。さらに一九〇七(明治四〇)年改定。墮胎者および墮胎助助者は一ヶ月から六ヶ月の重禁固、墮胎者をしに至らしめた助助者は一年以上三年以下の重禁固。
- 10)(7)による。筆者は未見。
- 11) 中山和子「清水紫琴研究」(『明治大学人文学研究科紀要』別冊一〇集一九九〇年三月)はレイプだとする。
- 12) 古在由直書簡二通目(日付不明)には、本文中にふれた三点のほかに、「一「クリスト」教を信ずるに至りたる所以と、これを信ぜんと欲するにいたりたる観念」がある。
- 13) 「厭世詩家と女性」は『女学雑誌』(1892・2・6-10)に発表。
- 14) 島崎藤村の「北村透谷二十七回忌に」(『大観』1921・7)がある。
- 15) 「一青年異様の迷懐」の冒頭には作者自注が付してある。「恋愛を知らずして、恋愛を画くは、殆んど素人の、水先案内をなすが如し。(略)予は敢へて、恋愛を説くとはいはじ。ただその一端はかくやらむと。(略)つゆ子しるす」と。
- 16) 駒尺喜美「紫琴小論 女性学的アプローチ」(『紫琴全集』解説1983・5)
- 17) 白狐の正体がばれて森に帰っていく母・葛の葉が、未練のあまり子に残す歌「恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」の、表の論理に対する裏側の迷い、愛と恨みを残して去りゆく者の執着の断ち切れなさは、そのまま「葛のうら葉」のヒロインのものだった。
- 18) 清水豊子「女文学者何ぞ出るに遅きや」(『女学雑誌』1889・11・29)
- 19) 田澤稲舟の「医学修業」(『文藝倶楽部』1895・7)「しろばら」(『同』、同・12)

清水豊子・紫琴(二) 「女権」と愛

「五 大堂」(『同』1896・11)。また樋口一葉はこの稲舟を先行者として敬愛し、その名を日記に記した。その作品としては「にぎりえ」(『文藝倶楽部』1895・9)「十三夜」(『同』、同・12)「われから」(『同』1896・5)など。